西岡武夫参院議長は、浮き沈みの激しい政界にあって自民党、新進党、民主党で要職を務め、三権の長に上り詰めた。近年は、民主党出身にもかかわらず菅直人前首相に退陣を要求するなど独自の視点で発信を続け、存在感を発揮。野田佳彦首相は「難しい議院運営や参院改革の議論で優れ揮された。誠に残念だ」との談話を発表した。

西岡氏は自民党時代、文教族の実力者として文相などを歴任。一方で、河野洋平前衆院議長らと新自由クラブを結成するなど、五五年体制に一石を投じる役割を演じた。

二〇一〇年、参院議長に就任すると、議長者会見を実施。東日本大震災発生後は、首相の菅氏に対し「モタモタしているなら辞めるしかない」などと批判した。民主党の小沢一郎元代表から、菅氏の後任を選ぶ民主党代表選への出馬を水面下で打診され、一時は意欲を示した。

民主党の輿石東幹事長は五日、都内で記者いに指導していただいた」と指摘。公明党の山口那津男代表は「選挙制度改革で、早期の改革案とりまとめに情熱を傾けられた」とのコメントを出した。

参院議長公邸には同日午前、小沢元代表や青木幹雄元自民党参院議員会長らが次々と弔問に訪れた。

（原田悟）

看護師が医師の補助として、高度な医療行為をすることを認める「特定看護師」の導入を検討している厚生労働省は、具体的な基準を盛り込んだ「看護師特定能力認証制度」の原案をまとめた。

床擦れで壊死した組織の切除や、がんの鎮痛薬の投与量・用法調整の判断などを、医師の指示の下ですることを「特定行為」として認める内容。五年以上の実務経験を持つ看護師が、専門研修を受け国家試験に合格することを条件とする。

二〇一三年度の開始を目指し、来年の通常国会に保健師助産師看護師法の改正案を提出まえ、さらに検討する。

高い能力を持つ看護師に医師の業務を補助してもらうことで、医師の負担を軽くし、患者の生活の質（QOL）も向上させる狙い。高齢化が進み在宅医療のニーズが高まる中、不足する医師に代わり、細かいケアにつっきりせず、医療現場で混乱が起きていると指摘があった。

新制度では、こうした医療行為の規定を法律で明確に位置付ける。「大学院修士課程に相当」とする二年間の研修か、八カ月程度の研修を義務とし、その期間に応じた医療行為を認める。

ゆうかんさん

言葉の力伝えたい

実社会での経験を学校の授業で子どもたちに伝える名古屋市の「キャリア・マイスター」に採用され中国語通訳の山田花尾里さん（三八）＝同市熱田区＝は「外国語が話せることで、世界が広がる喜びを伝えたい」と意気込む。

中国人の男性と結婚し、中国の大学で日本語を教えていた。日本に戻り「将来を担う子どもの教育に役立ちたい」と思い立った。

ぎくしゃくすることもある日中関係だが、「日中の懸け橋になれれば」との思いを胸に、市内の小中学校で教壇に立つ。

地域紙をスタート

愛知県豊川市の地域情報紙「すえひろハッピーライフ」を創刊。初代編集長の大学生竹内竜正さん（二三）＝同県蒲郡市三谷町＝は「地域を豊かに、元気にしたい」と意気込む。

学習塾や中国語研修を企画、運営する豊川市のデジタルバンクジャパンのインターン生となり、地元の飲食店や企業の社長を取材。A4二ページの一万五千部を無料配布した。四月以降は社員として発刊を支援。地元の協力を得て、三カ月ごとの定期発刊を目指す。

「二年後には五万部を目指したい」

カキPRに〝新技〟

三重県南伊勢町の五ケ所湾でカキ養殖業を営む井谷滋さん（七七）＝同町船越＝は町観光協会などと連携し、今秋からカキのオーナー制度を始めた。

約二十五年前に船越で初めて養殖を開始。井谷さんらが育てる「船越かき」はプリプリの食感で身が大きく、ファンも多い。オーナー制度は五ケ所湾や船越の名を売り出そうと始めた。オーナーは稚貝が付いたホタテの貝殻八枚の所有者となり、成長したカキがもらえる。今秋はカキを養殖いかだにつるす作業、来年度の冬は水揚げの体験があり「皆さんに来ていただいて喜んでもらえると、こっちも楽しい」とほほ笑む。

昨年から、海から幼生を採取し、一からカキを育てる天然採苗にも取り組む。地区の農家と連携し、特産のミカン狩りとカキ料理が味わえる体験プログラムも計画している。年を重ねても、新しいことに挑戦する熱意は人一倍だ。

マネジャー有終V

愛知大学野球秋季リーグの一部で、愛知学院大が四季連続優勝を果たした。同大四年のマネジャー、岩田由起子さん（二二）＝愛知県長久手町杁ケ池＝は「最後のシーズンも優勝できて良かった」とほほえんだ。

大学でマネジャーを始めたきっかけは兄で中日の岩田慎司投手の存在。小さいころからひたむきに取り組む姿を見て「選手を支えたい」。スコアの付け方を学び、データ集計など裏方に徹してきた。

「四年間で学んだことを社会人になっても生かしたい」と話す。

「岐阜産」売り込み

岐阜県産品をPRする「岐阜印これぞ日本！プロジェクト」のリーダー西願将也さん（三〇）＝岐阜市本町＝は、「岐阜は陶磁器や木工、和紙、刃物など暮らしに根ざしたものづくりが盛んだ」と話す。

プロジェクトは県の緊急雇用創出事業で七月から開始。ユニークな製品を発掘し、東京や県内での展示販売、サッカーJ2のFC岐阜とタイアップをして売り込む。

「職人らと出会い、懸け橋になれるのがうれしい。地場産業を底上げする手伝いができれば」と思いを語る。